

梅原恭則先生へ感謝を込めて

松崎 史周

梅原先生に初めてお会いしたのは、私が大学院に進学した平成9年4月のことでした。当時の私は他大学からの進学ということで多少なりとも不安を感じていましたが、そんな私を梅原先生は研究室が違うにもかかわらず温かく受け入れて下さいました。

大学院の授業は、先生がお書きになったご論文「2種の連文機能―連文機能と文法規則について―」（『言語と文芸』）に基づいて、文章に見られる連文機能を分析・分類するというものでした。授業を通して先生は連文機能の再分類をお考えのようでしたが、大学時代に国語学を十分修めてこなかった私は、自分の分担すら満足にこなせず、ほとんどお役に立てなかつたかと思えます。ただ、私自身は授業をきっかけに連文論（文章論）の論文を読むようになり、そのことが現在の実践に大いに役立っております。

同期の院生仲間と何度か先生のお宅に伺い、お酒を一緒に楽しむ機会もありました。先生は文学の話を楽しんでな

さり、時には私にも意見をお求めになることもありました。今となつては何とお答えしたか全く覚えていませんが、ほとんどまともなお返事はできなかったかと思えます。ただ、先生のお話をお聞きするたびに、先生の学識の深さを感じ、もっと勉強して、少しでも実のあるお返事ができるようになりたいたいと思つたことは強く覚えていきます。

大学院時代から私は国文法教育を専攻しており、大学院修了後も実践を重ねながら、研究会や学会に参加したり文章を書いたりしてきました。先生はそんな私に、休職中の山本清隆先生の代役として、学部の「文法指導論」の担当をご依頼下さいました。将来教壇に立つ学生の役に立てればと思い、昨年度後期の講義をお引き受けいたしました。勤務校の都合から隔週土曜ニコマというハードなスケジュールでしたが、学生は非常に熱心に取り組んでくれて、毎回やりがいを感じながら行うことができました。講義を行うことで断片的に書いてきたことに繋がりを付けることもでき、自分の研究の整理も行うことができました。貴重な機会を下さつた先生に感謝するとともに、ほんの少しばかりでも先生のお役に立てたことを嬉しく思っています。

思い返せば先生にお世話になつたことばかりで、感謝

の念に堪えません。先生が信大を去られるのは寂しい限りではありますが、お体にお気を付けいただき、好きな文学を楽しむ日々を送っていただければと思っております。

(まつざき ふみちか 長野清泉女学院中学高等学校教諭)